

自由な発想が進化させる 学生同士が学び合う空間

立命館大学

2011年4月、立命館大学衣笠キャンパスの図書館に新しい学びの空間「びあら」が生まれた。情報検索や資料の閲覧だけでなく、学生同士でディスカッションやプレゼンテーションの練習などができる学習施設だ。学生は自由な発想で開放的な空間を有効に活用して、互いを刺激し、切磋琢磨している。

仲間とともに学ぶ 楽しさを感じる場

立命館大学の「びあら」(ピア・ラーニングルーム)は、情報検索、自学自習に加え、仲間(ピア)との交流を通して、学生同士の主体的・創造的な学びをサポートする図書館内施設である。「主体的な学習者としての学びの転換を促すこと」「仲間とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」がコンセプトだ。

2010年、学校法人立命館は2020年に向けた学園のあるべき姿を「学園ビジョンR2020」として打ち出した。「多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開」「学ぶことの喜びを実現できる学園づくり」という行動指標を実現するため、図書館サービス課と入学前後の接続教育支援やFDなどに携わる教育開発支援課により「びあら」の開設が提案された。

図書館サービス課の中島麻恵課長補佐は「開設にあたり『なぜ図書館にそのような学習施設が必要なのか』という意見もあった。図書館なら学生同士の議論や調べ学習の過程で、必要に

なった図書をすぐに借りることができ、貸し出し不可の図書も閲覧できる。図書、雑誌、データベースなど、さまざまな情報が集積し、所属学部に関係なく学生が集まりやすい図書館内に開設する意義は大きいと伝え続けてきた」と語る。

かつては、学生が共同で学習する場合、各学部のラウンジや飲食店、下宿などで行うことが多かったという。びあらなら長時間議論ができるうえ、ネットワークにつながったパソコンが多数あるため情報共有が容易で、グループワークを行うのに適している。「このような施設を学生は潜在的に求めているのではないか」と中島課長補佐は話す。

開設当初は利用方法がわからず、学生がとまどう時期もあったが、グループ学習を要する課題などをきっかけに試行的に使い始め、今では活発に利用されているという。

2011年4月のオープン以降、2012年1月までの利用者は延べ5万人を超える。2012年4月には、学生の要望を受けて、びわこ・くさつキャンパス(BKC)にも開設された。

利用方法の疑問には 学生スタッフが対応

びあらで最も大きなスペースを占めているのが、大型ディスプレイ付きのパソコンやプロジェクター、可動式の机が配置されたグループワークエリアだ。必要に応じて机を並べ替え、パソコンや図書資料を見ながら議論できる。長時間の調べ物やディスカッションをしやすいように、フタ付きであれば飲み物を持ち込める。

パソコンエリアは情報検索やメールチェックなど、短時間のパソコン使用のためのスペース。プレゼンテーションルームには、大型スクリーンと演台、8組の机が設置されており、ゼミや学会での発表を想定した練習ができる。

施設の利用方法や機器の使い方、情報の検索方法がわからない学生には、IT・情報検索サポートカウンターに常駐する学生スタッフが対応する。高度なレファレンスを専門の図書館司書につなぐのもスタッフの仕事だ。相手が同じ学生なので、利用する学生は気軽に相談できる。

開かれた空間が 学び合いを促す

利用する学生の目的はさまざま。授業やゼミの課題に取り組むグループがあれば、異なる学部の学生同士で海外留学の準備を行うグループもある。学術系のサークルや共通の目標の下に結成された「自主ゼミ」による利用も多い。ホワイトボードを使ってプレストをしたり、プレゼンの準備のために大型ディスプレイに資料を映し出したりと、積極的に設備を活用している。「議論してプレゼン資料をつくり上げたり人前で発表したりする経験から得られる力は、社会に出てからも求められる」と中島課長補佐は話す。

集まったメンバーが、常に同じ課題に取り組んでいるとは限らない。取材当日、教員採用試験合格を目標とする自主ゼミのグループでは、ある学生は授業のレポートに取り組み、別の学生は教育実習での授業の計画を立てていた。「個々の課題は異なるが、めざす方向は同じ。気軽に質問し合えるし、ネットで関連文献を探して図書館で借りることもできるので便利」と学生の一人は言う。

「学び合い」はグループ内だけで行うわけではない。オープンスペースのため隣のグループが何をしているのかすぐに見えるし、プレゼンテーションルームはガラス張りなので中の様子が手に取るようにわかる。ほかのグループのやり方を見て機器やソフトの使い方を学んだり、プレゼンから刺激を受けたりする学生も少なくないという。設備の使い方を工夫し、社会で活躍できる力を学生同士で高め合う。びあらはその支援を果たしている。

利用者数が増えるにつれ、学生からは新しい学びの方法が提案されている。「サークルの成果物の展示やポス

ターセッションを行いたい」「スカイプを使って留学先の人々と事前に情報交換をしたり、BKCや立命館アジア太平洋大学の学生と交流したりしたい」といった要望が寄せられている。学生の自由な発想がびあらの可能性を広げつつあるようだ。

部署間の連携を進め 学習支援を充実

2011年4月には、先輩が新生に大学生活のノウハウを伝授する「キャンパスライフデザイン・カフェ」を開催した。2012年4月には、1年次対象の選択科目「日本語の技法」の履修者を対象とした「ライティングサポート・デスク」を開設。時間を決めて大学院生のTAをカウンターに配置し、希望者に対してレポートや論文の書き方を教えている。

図書館職員が学生を直接、教育する

場面は少ないが、びあらのミッションを実現して学生のニーズに応えるためには、学習支援サービスを充実させることが課題だと中島課長補佐は言う。そのために力を入れるのは、学部や他部署との連携だ。キャンパスライフデザイン・カフェは学生部、ライティングサポート・デスクは教育開発支援課との連携により実現した。今後はさらに、教学部門をはじめとした他部署との連携を進め、各部署が持つ教育力をびあらでの学習支援サービスに反映させたい考えだ。

「今後の課題としては、幅広い分野の論文の指導に対応できるTAを含めたスタッフの配置、国際部との連携による留学サポートなどが考えられる。学生のニーズ、国内外の大学の視察で得た知見、本学の将来像を掛け合わせ、従来の図書館にはない領域の支援に挑戦していきたい」と中島課長補佐は話している。

図表 衣笠キャンパス図書館の「びあら」のレイアウト



グループワークエリアを利用中の教員をめぐす自主ゼミのグループ。